

何を追い、どう書き続けるか ―「働きつつ学ぶ」を40年余り実践して―

高田好章

この機会に、これまでの経済学の学びへの簡単な「前史」と、どのように「働きつつ学ぶ」の道を、基礎経済科学研究所(基礎研)と共に歩んできたのか、歩むことができたのかを、綴ってみます。

経済学前史

大阪・堺での中学・高校時代、ともにコーラス部に入り、まったく勉強もしないでクラブ活動に明け暮れ、高校ではフォークソングのグループを作り活動、下手くそだけどなんとオーディションを経て深夜のラジオ番組(当時誰もが知っていた「ヤンタン」)にも出演し、満喫した高校生活でした。その傍ら、高校で尊敬する音楽の先生から「弁証法なるものを読めば」との言葉に、図書室にある弁証法的唯物論の本を手にとり学習をしていました、と言っても初歩的な本でしたが。最近知ったことですが、実は当時、組合系の先生が集められた府立高校だった、とのこと。今は「バブリーダンス」で全国的に有名になり、校長はリクルート出身と、すっかり姿が変わったのですが。

その後、浪人しても望みの道へ進むことができず、その器にあらずと断念し異なる道へ。駒澤大学に通う従兄から、3月も末にまだ受験できるからと勧められ、駒澤大学経済学部の夜間部(商経学科)に学力が乏しくとも入学でき、翌年に昼間部(経済学科)に転科。それが決まった3月に『資本論』大月普及版全5巻を渋谷・三省堂で購入、分からなくても1年間で読み切ろうと思った、ということは覚えています。

経済学を学び始めて

2年生から課外ゼミ「経済学研究会」に入り、『資本論』の本格的学習に入り、3・4年生のゼミは戸田武雄先生(河合栄治郎門下のマル経重鎮)の下で学び、『経済学部課外ゼミナール論集』に「古典派経済学からマルクス経済学成立までの利潤の認識について」という、初歩的な論文を書いたことがあります。4年生のときに「外書講読(ドイツ語)」の講座で阿部弘先生に「運命的な」出会い、大学4年間の勉強ではまだまだ足りない、もっと勉強を続けたいとの思いが出てきて、阿部先生の勧めもあり、決まっていた就職先を断り大学院へ進んだのです。修士課程・博士課程ともに戸田ゼミに所属しながら、阿部先生や駒大の多くの先生との研究会に参加しました。阿部先生の教えを受けて勉強することに、戸田先生から苦言をいただいたことがありました、「あなたの指導教官は誰ですか」と。大学院では、「独占の理論的研究」、さらに具体的な分析として、「鉄鋼業、主に新日鉄による平炉・電炉メーカー支配」を研究しました。

基礎研東京支部(東京基礎研)との出会い

博士課程1年か2年の時に、駒大の狭い勉学環境に飽き足らず、駒沢公園向かいの東京都立大大学院(阿部先生の出身大学院でその関係から)のゼミに潜り込みました。ここで基礎研メンバーと出会い、基礎研東京支部に入会、1977年頃のことです。東京支部では、主に産業分析の研究会に入り、会場はなんと喫茶店で、都立大の院生だけでなく、一橋大の院生やこれから大学院を受ける学生とも知り合う機会となりました。また、様々な研究者や企業に勤める労働者研究者を知ることができました。基礎研の第1回研究大会(1978年7月28～30日、大津・西教寺)に、東京支部として参加し、分科会で報告しました、論題は「独占禁止政策、その現状と課題」。

博士課程の3年となりましたが、毎年論文を書いても乏しい業績では研究者としての道は険しく断

念し、9年間の東京生活を切り上げ、兄の創業間もない大阪の小さな化学会社(エアゾール・化粧品製造業)へ就職しました。これが私の二番目の「転換点」です。爾来、「二足わらじ」のひとつとして、仕事は営業から総務へと、35年間勤めました。

「働きつつ学ぶ」への道筋

1979年の帰阪後、会社の仕事を命じられるままに、それでも創意工夫して仕事をこなすとともに、基礎研大阪第三学科に参加し、言葉通りの「働きつつ学ぶ」生活が始まりました。しかし、実は本当の「働きつつ学ぶ」生活はもう少し後でした。ここで、森岡孝二先生や多くの学科仲間に出会い、「働きつつ学ぶ」への大きな影響を受けます。実は、修士論文の執筆の際に森岡先生の独占理論の論文を大学の図書館で見つけ、学び引用をしていたのです。森岡先生とは、まずは紙の論文から学び、さらに実際に指導も受けた、という奇遇だったのです。大阪第三学科では、毎月2回のゼミで古典と現代物を並列で学ぶ、という形で開催しています。古典として、まずは『資本論』、これを第1巻から第3巻まで、さらに『金融資本論』、『帝国主義論』もここに加わります。大学・大学院時代を通じて学んだ『資本論』を、ここでも、とても興味深く議論して学ぶことができます。

大きな転機は、森岡先生から自分の仕事の研究を始めることへの示唆を受けたことです。それまでは主に理論的なことに興味があり、大阪第三学科での議論がどうしても理論的な事に向かっていた。そんな私に、森岡先生からの示唆は大きな転換点となったのです。

「働きつつ学ぶ」への示唆

快く兄の会社に勤め始めたのではなく、仕事は忙しく走り回るものの、心の中ではやっぱり経済学をもっと極めたい、との思いが強く、当時は仕事と研究とは別の箱に置く、という仕事と研究が乖離した姿となっていました。そこに森岡先生からの示唆は、自らの仕事を対象に研究するという、基礎研の理念である「働きつつ学ぶ」の実践がここにありました。その成果が「経済科学通信」第30号(1981年1月)に書いた「日本のエアゾール産業と独占支配 — 中小企業と独占支配体系 —」です。これをベースに大阪第三学科で出版した最初の本『勤労者の日本経済論』(森岡孝二編、1986年)に、「新興産業における中小企業と独占 — 日本のエアゾール産業 —」を書きました。

ただし、ここでの分析対象は「産業論」であり、また「業界分析」であって、大学院時代の研究姿勢のまま、本格的な「働きつつ学ぶ」視点には立っていない、ということをして思います。そこで森岡先生からさらなる与えられテーマは、「日本的雇用慣行」の問題です。これが「非正規労働者」、さらに「派遣労働者」の問題へと進んだのです。今、正に私が取り組んでいる研究対象です。

いつかは研究をしたい、と思いながら、仕事を終えた労働者は何を対象に研究するのか。もう仕事の事はいい、忘れたい、かつて思い描いた理論的な研究をしたい。そんな人を幾人かみてきました。確かに、理論的な研究は魅力あります。しかしながら、「労働者研究者」として、やはり自分が関わってきた仕事の問題点、働く人の問題点も研究の対象にしてほしい、「あなたにしか出来ないことですよ」と。

「働きつつ学ぶ」への本格的な歩み

ここに至って、自らの働き、仕事をする中での経験と感じたこと、さらにそれと関連させて客観的に考察を行い分析し、文章にしていく。これが本格的な「働きつつ学ぶ」視点、「働きつつ学び研究する」ことであると確信したのです。その後、大阪第三学科の人たちと共に書いた4つの論文がその成果だと思っています。

す。「崩れゆく終身雇用制と非正規労働者」(森岡孝二編著『現代日本の企業と社会—人権ルールの確立をめざして』、1994年)、「化粧品受託製造業と人材派遣」(大阪第三学科開講25周年記念『変化のなかの企業と社会』2003年)、「雇用の外部化と製造業における派遣・請負」(森岡孝二編著『格差社会の構造—グローバル資本主義の断層』、2007年)、「人材派遣業の膨張・収縮と経営実態—近年の製造派遣を中心に」(森岡孝二編『貧困社会ニッポンの断層』2012年)。

自分が働いている現場を直視し、そこにどんな問題があるのか、常に見聞きする。間接的に見聞きすることも大切、だが直接的に体験することが大切です。次のような体験をしました。基礎研研究大会での発表の際、具体的な事は忘れましたが、仕事で経験したことを発表しました。私にはすこぶる当然の事として話していましたが、それを聴いていた所員の方々から、その当然の事への質問がいくつも出てきて、ビックリ。こんな私の業界では常識的なことがまだ知られていない、それこそ研究の材料になるのだと、実感したのです。それから、自分の仕事、周りの仕事など、よく観察し、それ自体が一つの研究テーマになると実感しました。研究の素材は仕事の中に転がっている、それが「働きつつ学ぶ」の一つの実践方法なのです。もう一つ加えるならば、今流行りの「社会人大学院」は年限が限られています。年限のない、終わりのない研究の場として、基礎研は貴重な存在なのです。

「働きつつ学ぶ」の体験談から

これまで、いくつかの「働きつつ学ぶ」の体験談を書いてきました。「働きつつ学ぶ —私の経験から」(パンフ 基礎研自由大学院公開講座「時代はまるで資本論—今こそ求められる学びとは—」、2009年12月15日発行)から、長い文章なので、論点を要約します。

- ・働きながら、自らの仕事を客観的に視る目を育てる
- ・それを、家族との、地域との、社会との、経済との、世界との関係で捉える
- ・働きつつ学ぶ人達はいつもフィールドワークをしている、目の前に研究対象がある
- ・それが如何に全体と結びつくのか、特殊な事か、普遍的かを見極める
- ・世の中の進む方向、経済の行方を知る力量を培い、広い見識を持つ
- ・共に学ぶ人達・仲間がいるからこそ、続けることができる
- ・文献を読み論点・批判点をまとめ、資料を集め分析し、自分の言葉で書く
- ・仲間で発表し、批判に応え、書き直す
- ・仕事をしながらどこまで深く分析できるのか、書くことで日々鍛えられる
- ・「働きながら学び、研究する」、それが「労働者研究者」だ

※上記の全文は以下のサイトに掲載しています：

http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/pdf/2009-12-15_Pamph_Jidai-Shihonron.pdf

おわりに

これまで心ならずものいくつかの「転換」がありましたが、今その道筋をたどってみると、結果として良かったと思います。音楽を楽しみ、仕事の経験を活かし、研究を続けてきました。労働現場を知り体験してきた「強み」を生かし研究を発表し、論文を書くことができる、それが基礎研に集う労働者研究者が姿です。

共にしている基礎研の所員・所友や多くの人に、一つの物語として心に残ればと、記しました。

※「高田好章のページ」のサイト：<http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/>